半夏生（はんげしょう）

加藤良一　2017年7月2日

もうだいぶ以前に休刊になっていますが、月刊『言語』という雑誌がありました。日本語に関するものとしては「日本語学」、「月刊日本語」あるいは「日本語の研究」などと並んで貴重な雑誌でした。

その中のコラム「暦のことば」を女子美術大学名誉教授の岡田芳朗氏が連載していました。2007年7月号は「半夏生（はんげしょう）」の紹介でした。

髪が気になる方にはいささか申しわけありませんが、コラムは南部絵暦にある老爺が禿（はげ）ができたことを嘆いている絵「半夏（禿）生」について書いています。これは「禿生ず」で半夏生と読ませるといいます。禿は方言で「はんげ」というからまさに言い得て妙ですね。

フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』では、半夏生をつぎのように説明しています。

半夏生（はんげしょう）は雑節の一つで、半夏（烏柄杓（からすびしゃく））という薬草が生えるころ（ハンゲショウ（カタシログサ）という草の葉が名前の通り半分白くなって化粧しているようになるころとも）。

七十二候の一つ「半夏生（はんげしょう）」から作られた暦日で、かつては夏至から数えて11日目としていたが、現在では天球上の黄経100度の点を太陽が通過する日となっている。毎年7月2日頃にあたる。

農家にとっては大事な節目の日で、この日までに農作業を終え、この日から5日間は休みとする地方もある。この日は天から毒気が降ると言われ、井戸に蓋をして毒気を防いだり、この日に採った野菜は食べてはいけないとされたりした。

岡田氏のコラムでは、半夏について、さといも科の多年草で、太陽暦の7月1日か2日ごろに花が咲くところから半夏生の名が付けられたとしており、和名を「からすびしゃく：烏柄杓」（写真）、根は漢方薬の「ほそぐみ」で、咳止めやつわりなどに用いられるとして

います。さらに、半夏のほかに「はんげしょう」（方白草：かたしろぐさ）というどくだみ科に属する多年草があるので、はなしが混乱しているようです。

「はんげしょう」（写真）は、夏至のころに茎の上のほうの葉の片面が白く変色するところから、ほんとうは「半化粧」だという説があるとも紹介していました。

290.　はんげしょう（かたしろぐさ）　〔どくだみ科〕
Saururus chinensis *Baill.*

水辺にはえる多年生草本．草全体に一種の臭気がある．根茎は白色で太く，泥の中を横にはっている．茎は直立し60～100cmぐらいになり，質は丈夫で，縦に数本の稜がある．葉には柄があって互生，長卵形か楕円形で長さ8～15cmばかり，先は尖り基部は耳状心臓形で，明らかな５本の脈があり，表面は淡緑色でなめらかである．6～7月頃茎の先のほうの2～3枚の葉は表面が白くなり，この白い葉に向いあって穂状の総状花序を出し，多数の白い小さい花をつける．穂はつぼみのうちは下にたれているが，開くのにつれて立ちあがってくる．総包は無いが，花の下には卵円形の包がある．花には柄があり，花被は無く，おしべは6～7本，その中にめしべが１本ある．子房は4～5枚の心皮から出来ている．〔日本名〕半夏生（夏至から11日目即ち７月11日頃）の頃に白い葉をつけるからとも言い，また葉の半面が白いから半分化粧した意味だともいう．カタシログサ（片白草）は葉の半面が白いことから名ずけられた．〔漢名〕三白草．

牧野新日本植物図鑑より

なお、リンクした写真は畑田文彦氏が運営する「私の花図鑑」というＨＰに掲載されているもので、ご本人の承諾を得ていることを付け加えておきます。畑田氏のご好意に深謝致します。

Back　「ことば／文芸」TOP へ戻る

Home　「ホームページ」表紙 へ戻る